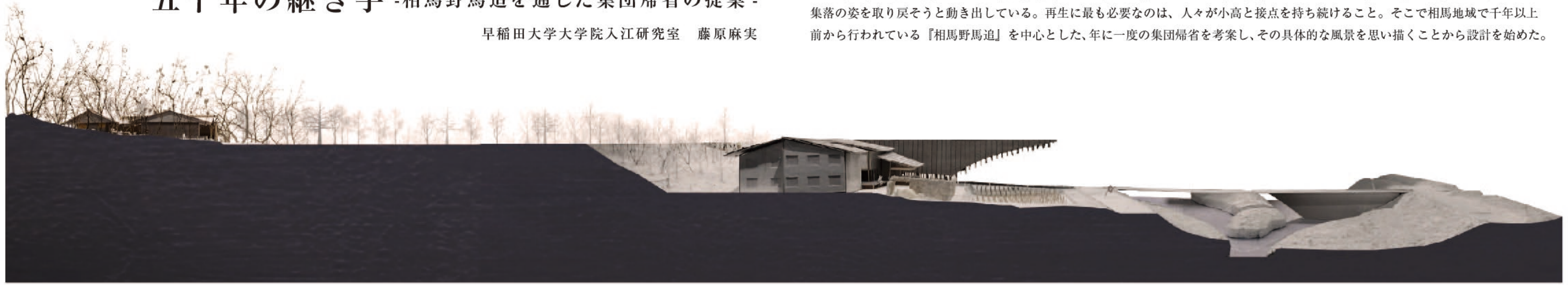


# 五十年の継ぎ手 -相馬野馬追を通じた集団帰省の提案-

早稲田大学大学院入江研究室 藤原麻実

2011年の東日本大震災によって、福島県相馬地域は津波と原発の二重の被害を受けた。しかし2016年の避難区域解除を起点に元の集落の姿を取り戻そうと動き出している。再生に最も必要なのは、人々が小高と接点を持ち続けること。そこで相馬地域で千年以上前から行われている『相馬野馬追』を中心とした、年に一度の集団帰省を考案し、その具体的な風景を思い描くことから設計を始めた。



## 福島県相馬地域における集・散の歴史的起点

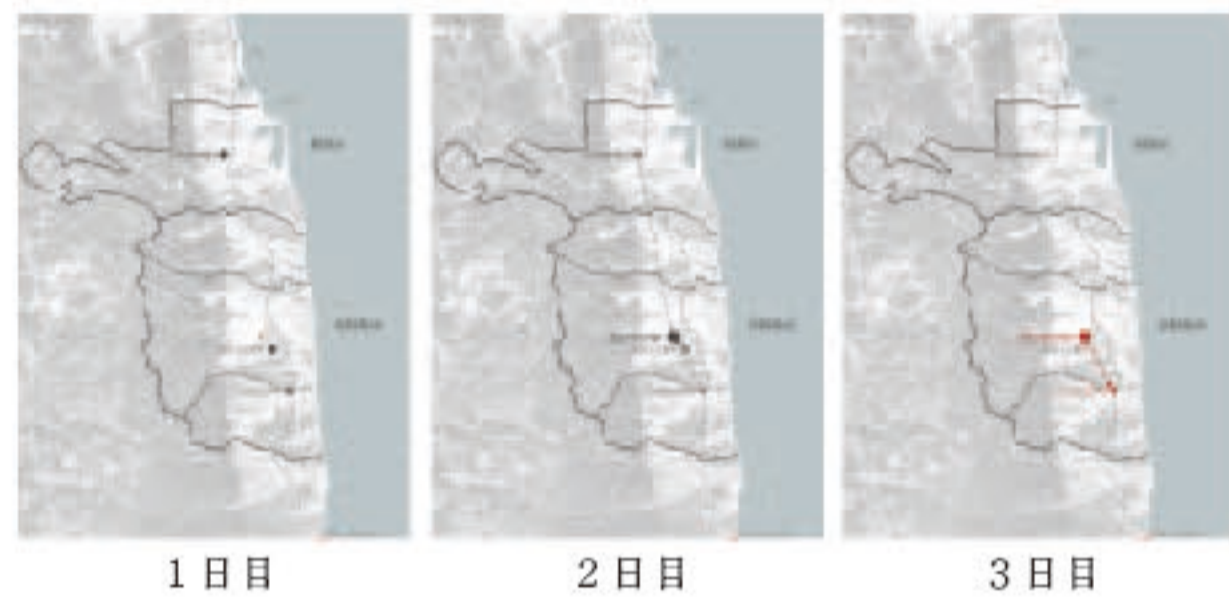
940

これまでの町の営み

2011

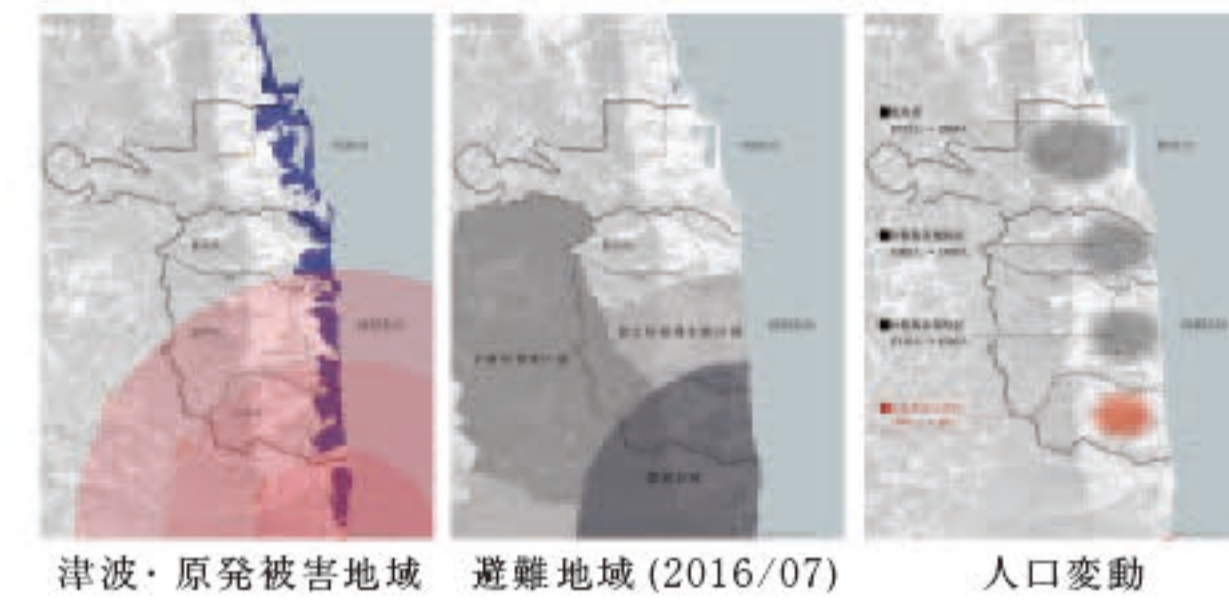
将来の町の営み

### 集の歴史 | 相馬野馬追 (940-)



今から千年以上前、相馬家の先祖と言われる平将門が軍事演習のために相馬野馬追を始めたと言われている。当初から三日間のプログラムで行われ、三つの神社(中村・太田・小高)と雲雀ヶ原祭場を人と馬が往復し、その道中は祭の賑わいに包まれる。

### 散の歴史 | 東日本大震災 (2011-)



相馬地域の中で最も南に位置する南相馬市小高区は、東日本大震災による原発の影響を受け、五年間宿泊が制限されていた。その間に86%の住民が町を去り、残ることを決めた高齢者達は再生の兆しが見えない町の中で孤独な生活を強いられている。



藩	8
藩主	17
御一家	29
城下士と城下士並	810
他の藩士	
宇多郡	475
北郷	312
中ノ郷	331
山中郷	137
<b>小高郷</b>	<b>170</b>
北標楽部	179
南標楽部	160
明治以後の役旗	3
<b>計</b>	<b>2641本</b>
	(『相馬市志』第六巻より)

・野馬追は騎馬に乗り、幅三尺・高さ五尺の旗を取り合う競技である。

・家系ごとに様々な願いを込めてデザインされ、同じ模様や同じ色の旗は存在しない。

・地域全体で2641本の旗が存在し、小高郷は170本所有している。



1. 車が重要な手段 2. 曲がった標識 3. 放置されたゴミ 4. 仮設スーパー 5. 外国種雑草の増殖  
6. 解体される住宅 7. ゴーストタウン 8. 雑草が茂る公園 9. 人気のない電車 10. 放射線量の表示  
11. 住民の意見

・人口減少が最も著しい南相馬市小高区において現地調査を行った。五年間放置された町は急速に荒廃が進み、元々人が暮らしていたことが想像できないほどに物寂しい風景が広がっていた。そんな中でも、残留する高齢者は再生を願い、元の住民が帰ってくる日を待ちわびている。

着眼：残留高齢者は再生の日を迎えることができない

01. 地域全体としての再生  
小高区は南相馬市の一部であり単体で動くことができず、地域全体の問題として捉える必要がある。

02. 次世代の帰還を目指す  
現在残留しているのは高齢者であり、小高区が町の営みを続けるには次世代の帰還が不可欠である。

03. 新たな魅力の創出  
住民が激減した小高区に、再び人々の目を向けさせるには、今まで町になかった魅力の創出が必要。

2061  
小高再生

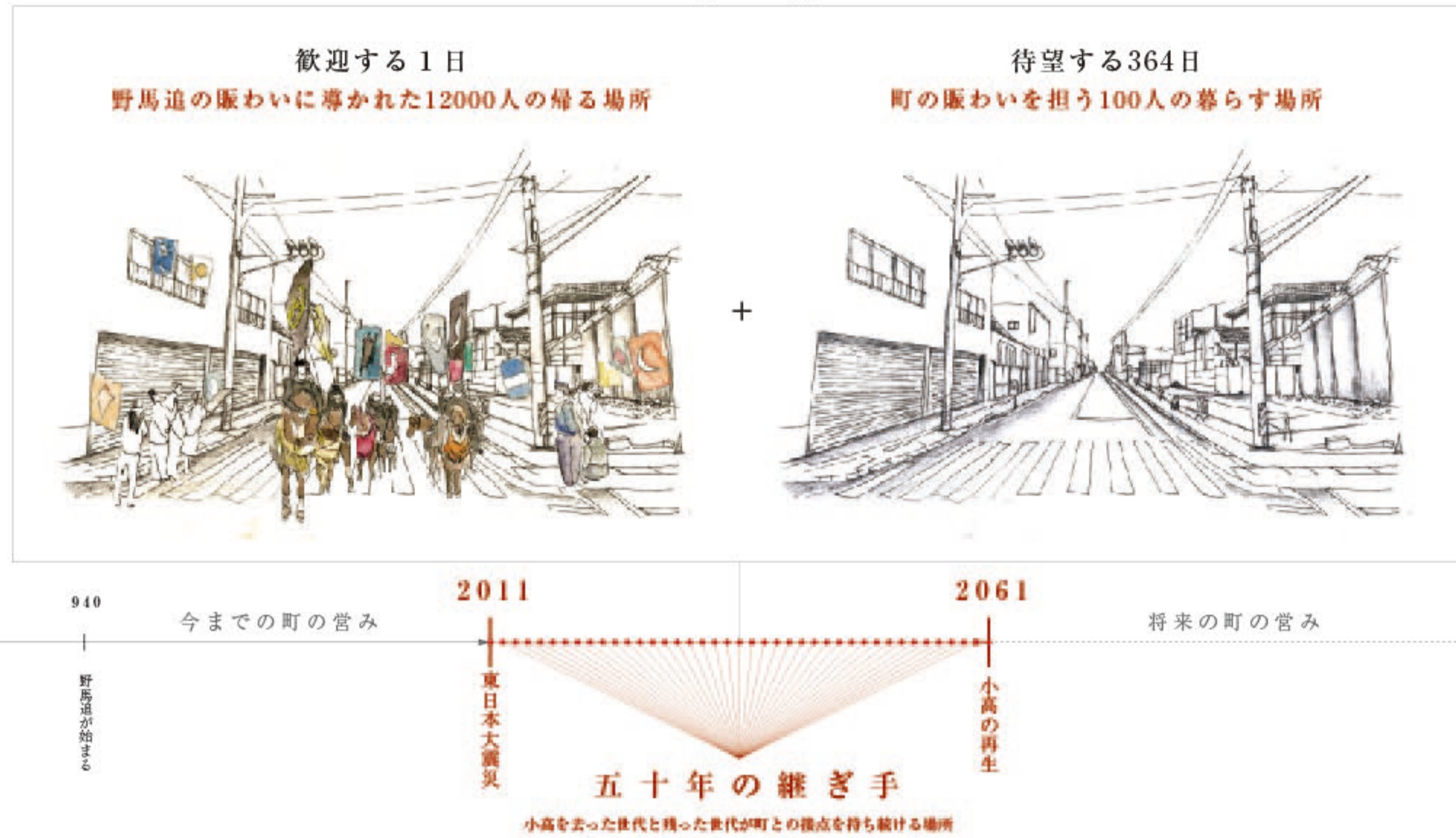
残留高齢者の寿命

新たな担い手が必要な時間

残留する高齢者は、小高区の再生には五十年の月日が必要であると語っていた。彼らが再生の日を迎えることは年齢的に困難であり、再生までの空白の時間には、町の営みを存続させる担い手が必要とされる。

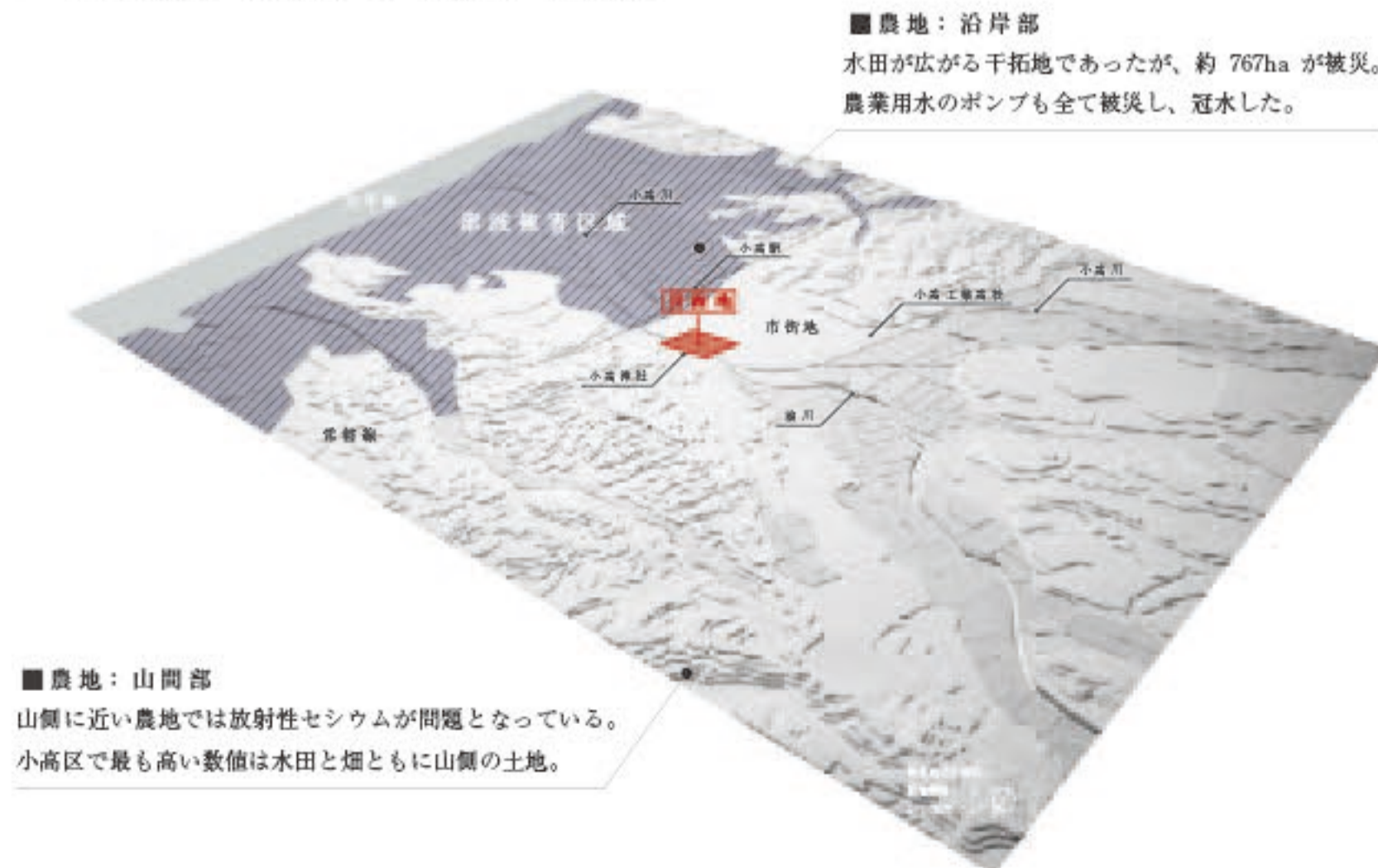
提案：通時的・共時的な集団帰省による再生の視覚化

1年×50回



そこで、相馬野馬追の最終日を旧住人を歓迎する日とし、それ以外の364日を旧住人の帰省を待望する日とし、それによる一年を五十回続けることで再生を視覚化させながら五十年を繋ぐことを提案する。集団帰省を通じて旧住人に小高区の現状を正しく認識させることで、通時的・共時的に帰還という選択肢を与え、新たな担い手になることを期待する。

敷地：相馬野馬追の最終地点



小高区の沿岸部は津波によって全て浸水し、山間部は高濃度の放射線量によって食品生産のメドが立たず、共に壊滅的な被害を受けた。津波被害を受けた沿岸部と原発被害を受けた山間部の間に位置し、相馬野馬追の終着地点である小高神社の麓を敷地とする。  
二日目の甲冑競馬と神旗争奪戦の観戦を終えた旧住人は、騎馬武者と共に行列しながら最終地点小高神社を目指し、かつて自分の暮らしの場であった市街地の現在の様子を目の当たりにする。麓では現住人が旧住人の帰省を心待ちにしている。

全体計画

小高神社の麓に妙味橋から小高神社までを一体とした、集団帰省所を計画する。この場所は相馬野馬追と共に帰省した旧住人に対する(歓迎・宿泊・伝達)の拠点であり、三つの役割が相互に依存し合うことによって、意義のある集団帰省を成立させることに繋がる。

既存改修宿舎

旧住人100人が寝泊まりする個室

既存改修宿舎

祭で奮闘した馬が眠りにつく

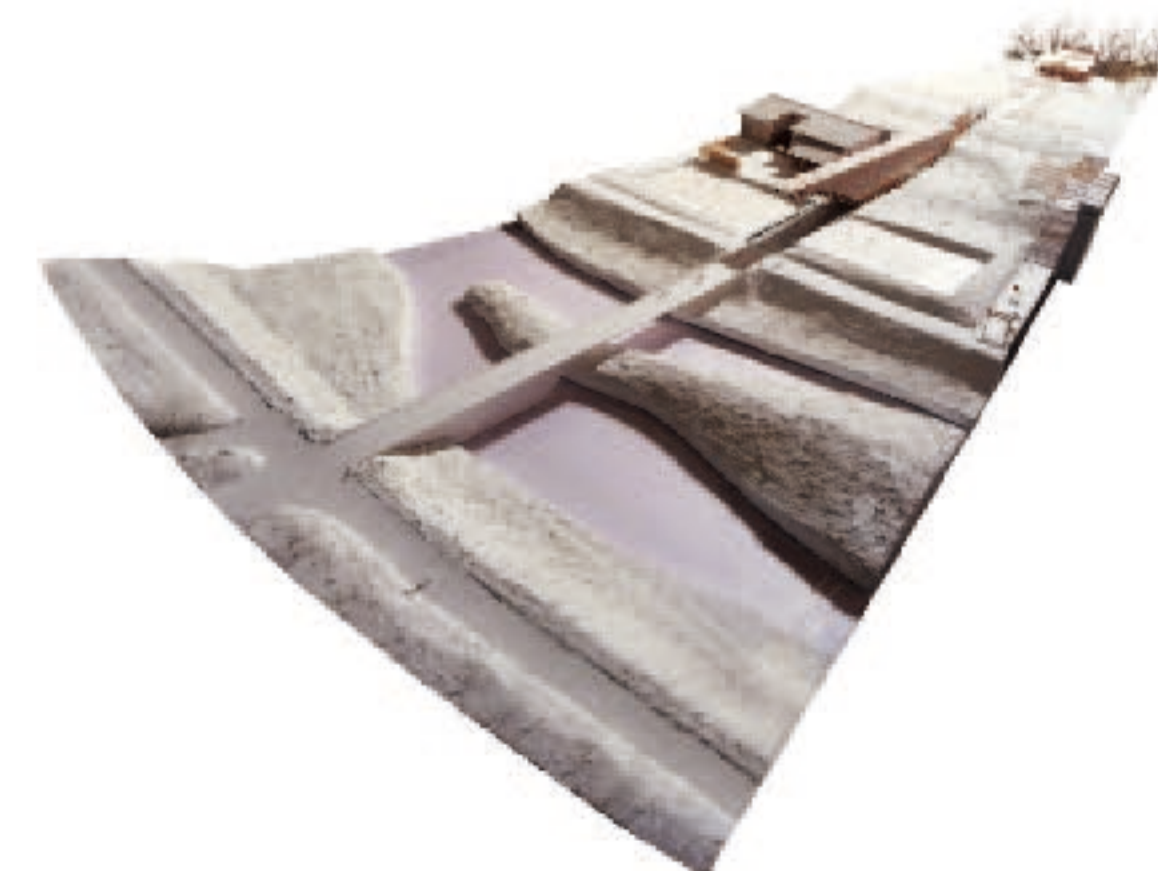
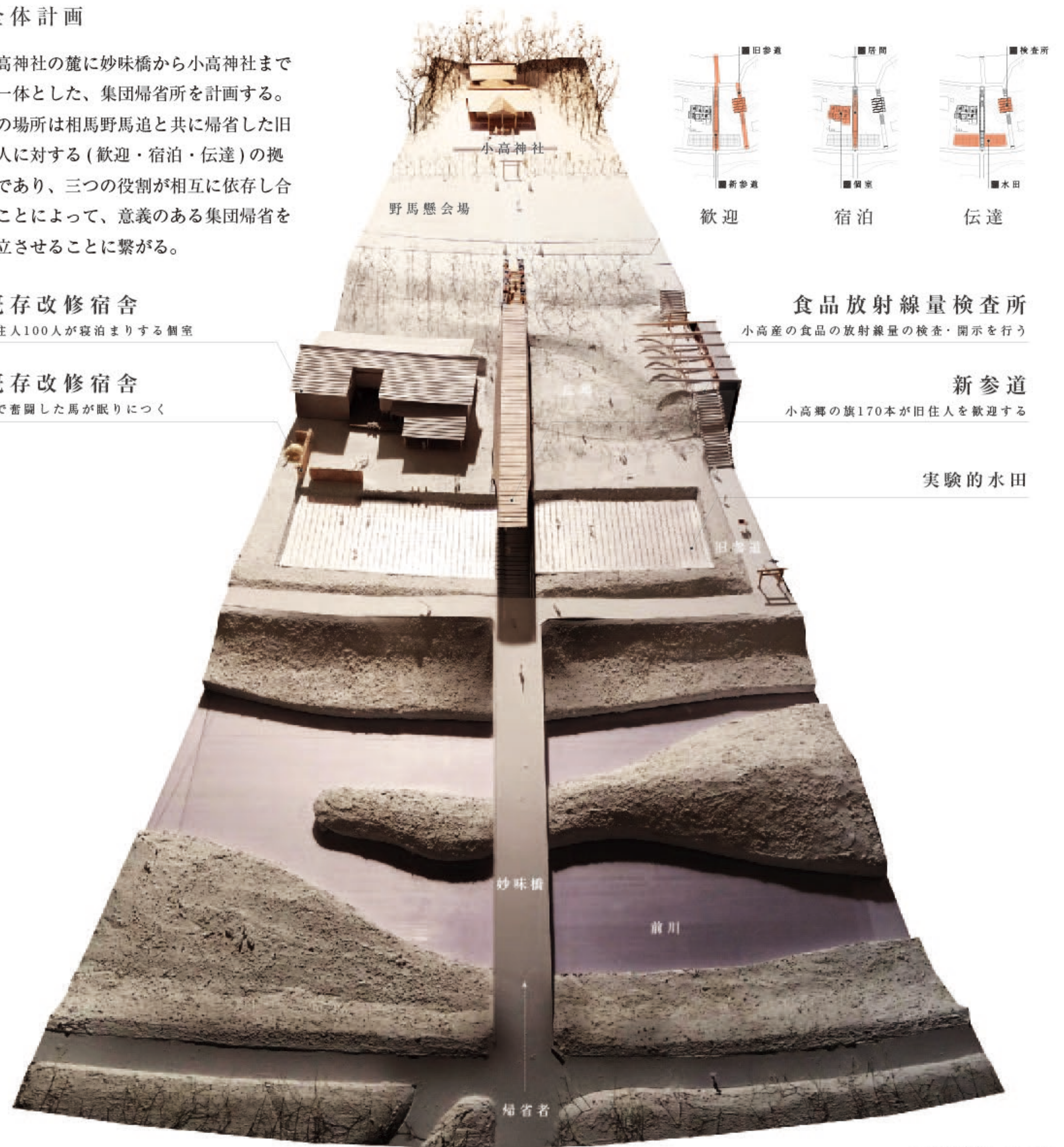
食品放射線量検査所

小高産の食品の放射線量の検査・開示を行う

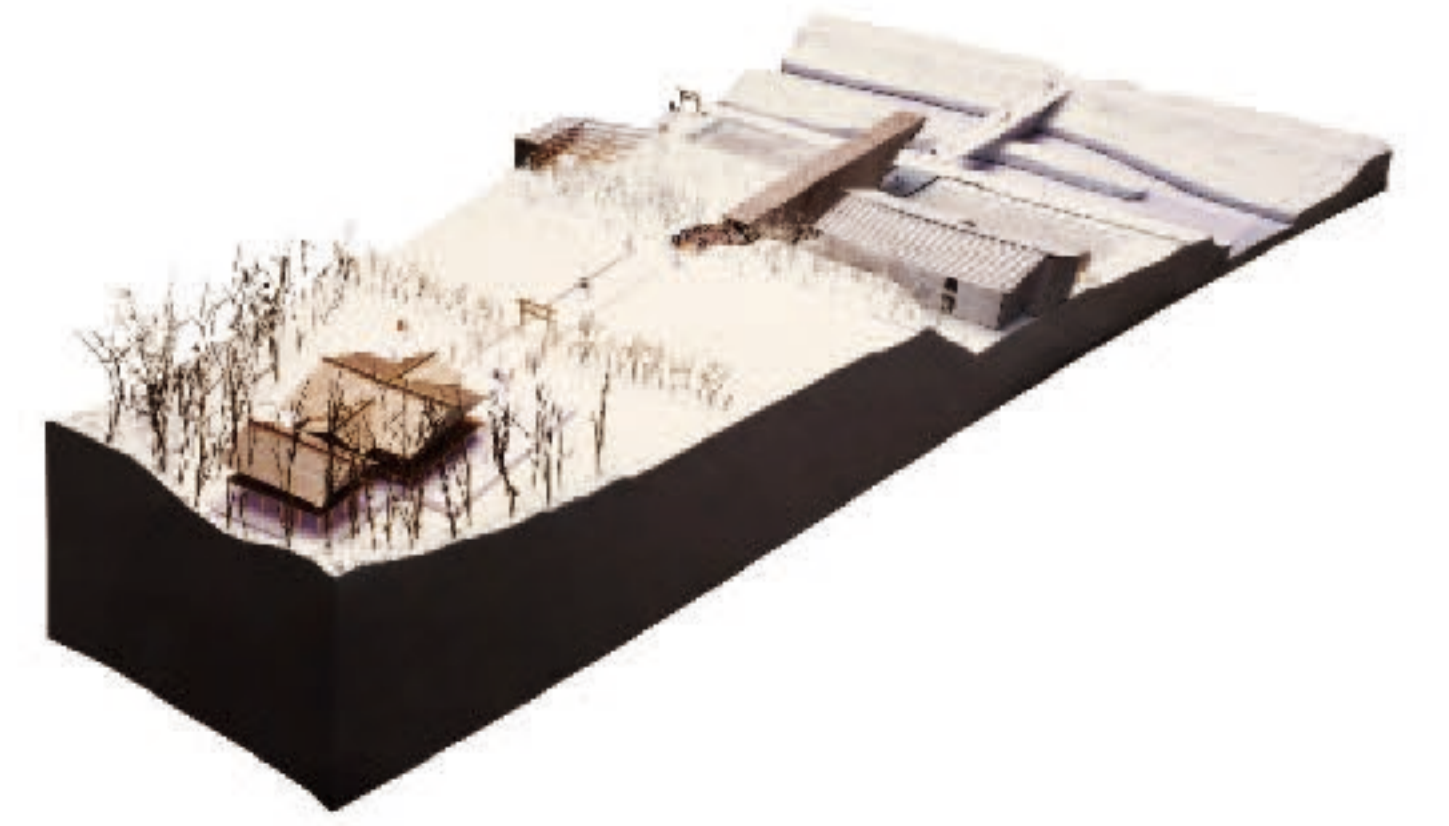
新参道

小高郷の旗170本が旧住人を歓迎する

実験的水田



市街地からの俯瞰



小高神社からの俯瞰

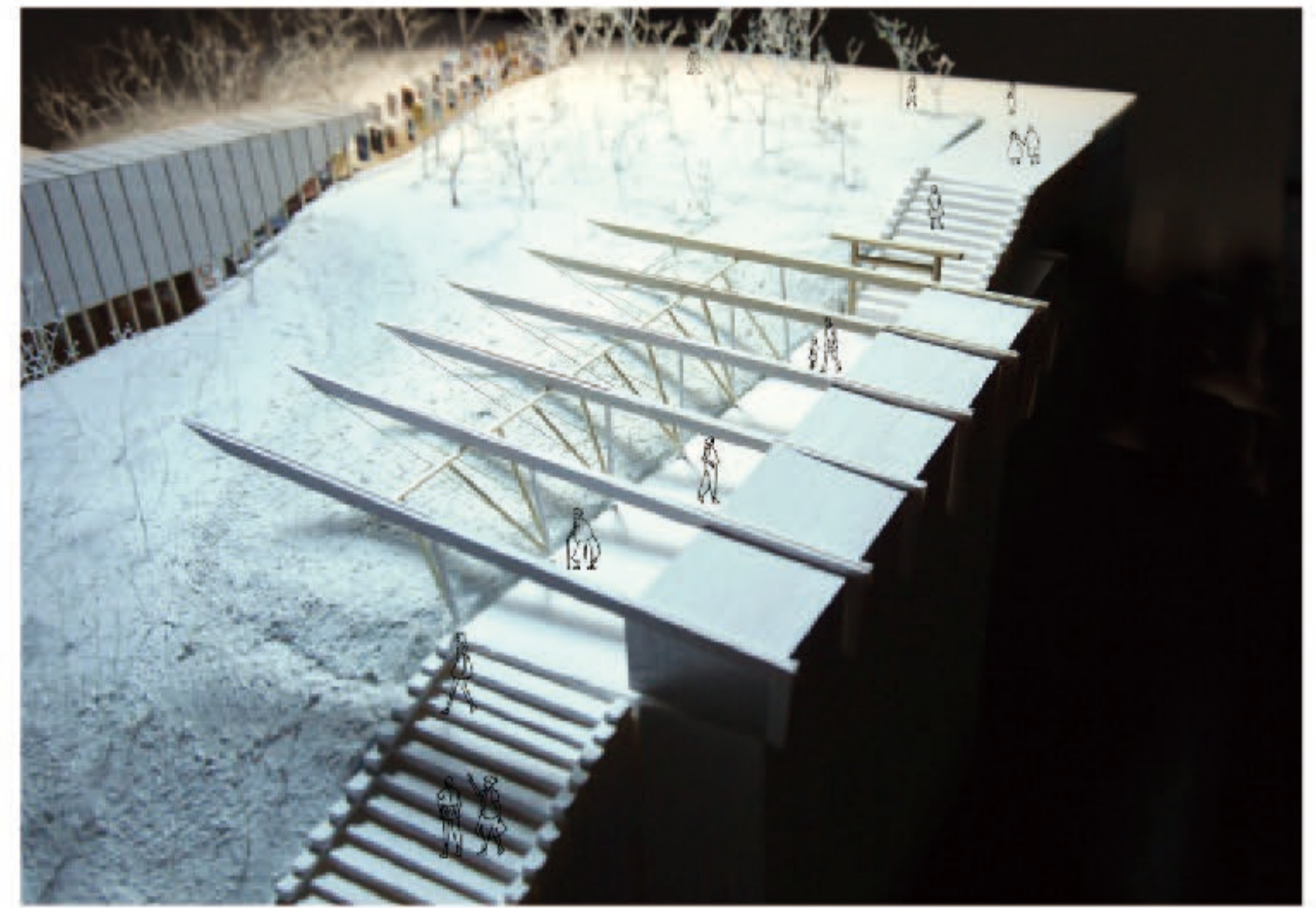




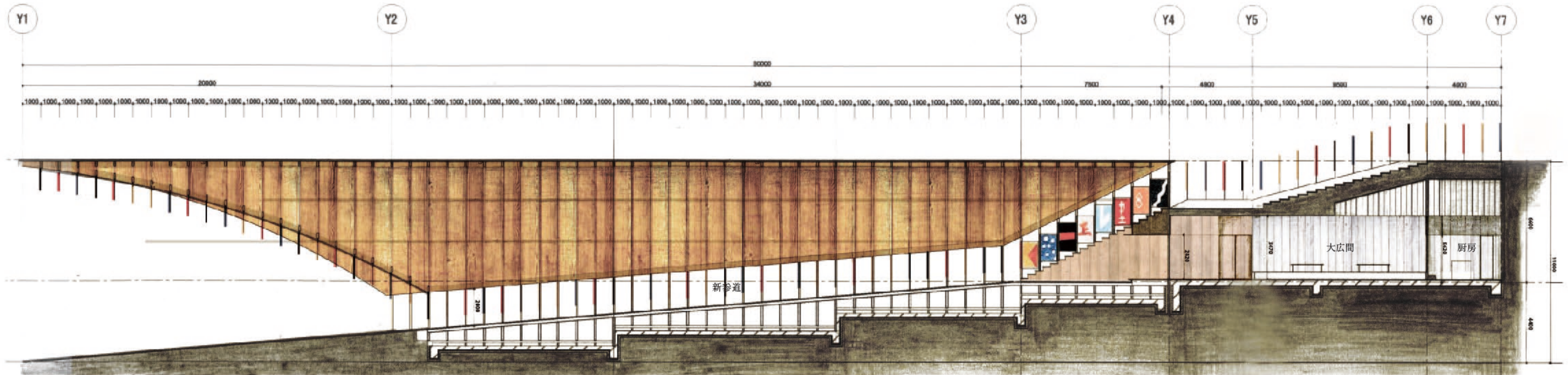
■歓迎の雑ぎ手 新参道の旗の並びは内部まで侵入し、その上昇に導かれて階段を上ると小高神社に到達する



■宿泊の雑ぎ手 内部から外部に伸びる宿舍の縁側と厩舎が向かい合い、そこに人と馬が憩い、夜を明かす



■伝達の雑ぎ手 東側に食品放射線検査所が位置することで、旧参道を上ると同時に食品の安全性を認識する



新参道長手断面図 S=1:200

計画：364/365日



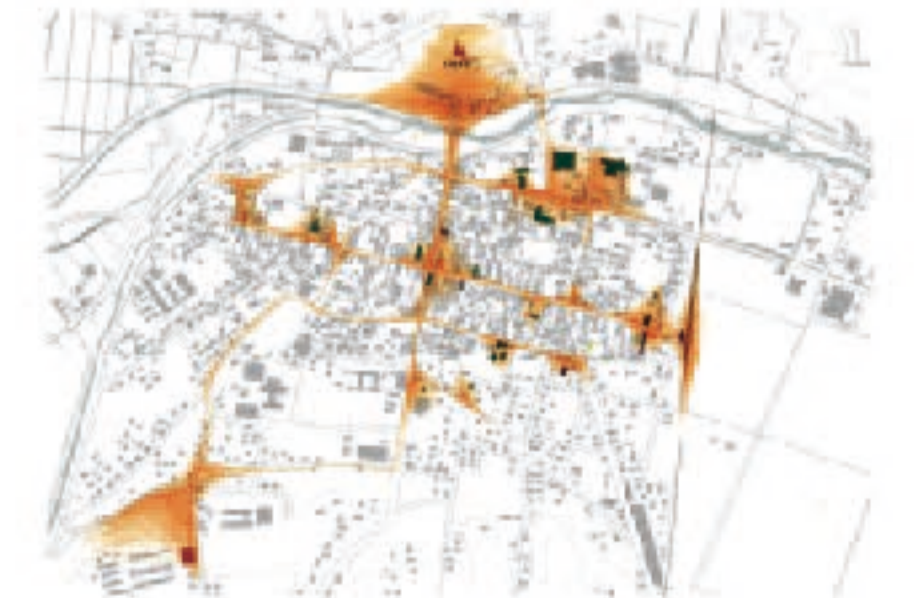
相馬野馬追の最終日を過ぎると、新参道に挿入されていた小高郷の旗は取り外される。長手断面 Y1-Y2 の部分は梁に取り付けたワイヤーに吊り下げることで旗を設置しており、最下部のワイヤーを引くことで容易に全ての旗を取り外すことができる。



1kmの通学路



点在する再開した店舗



通学路と店舗間に高校生が介入する

集団帰省所は新設高校の生徒100人の学生寮として稼働する。新設高校と学生寮の距離は約1kmであり、その間には再開した店舗が点在している。高校生が移住することで通学路と店舗までの道に介入し、町が満遍なく活気付いていくことが期待できる。